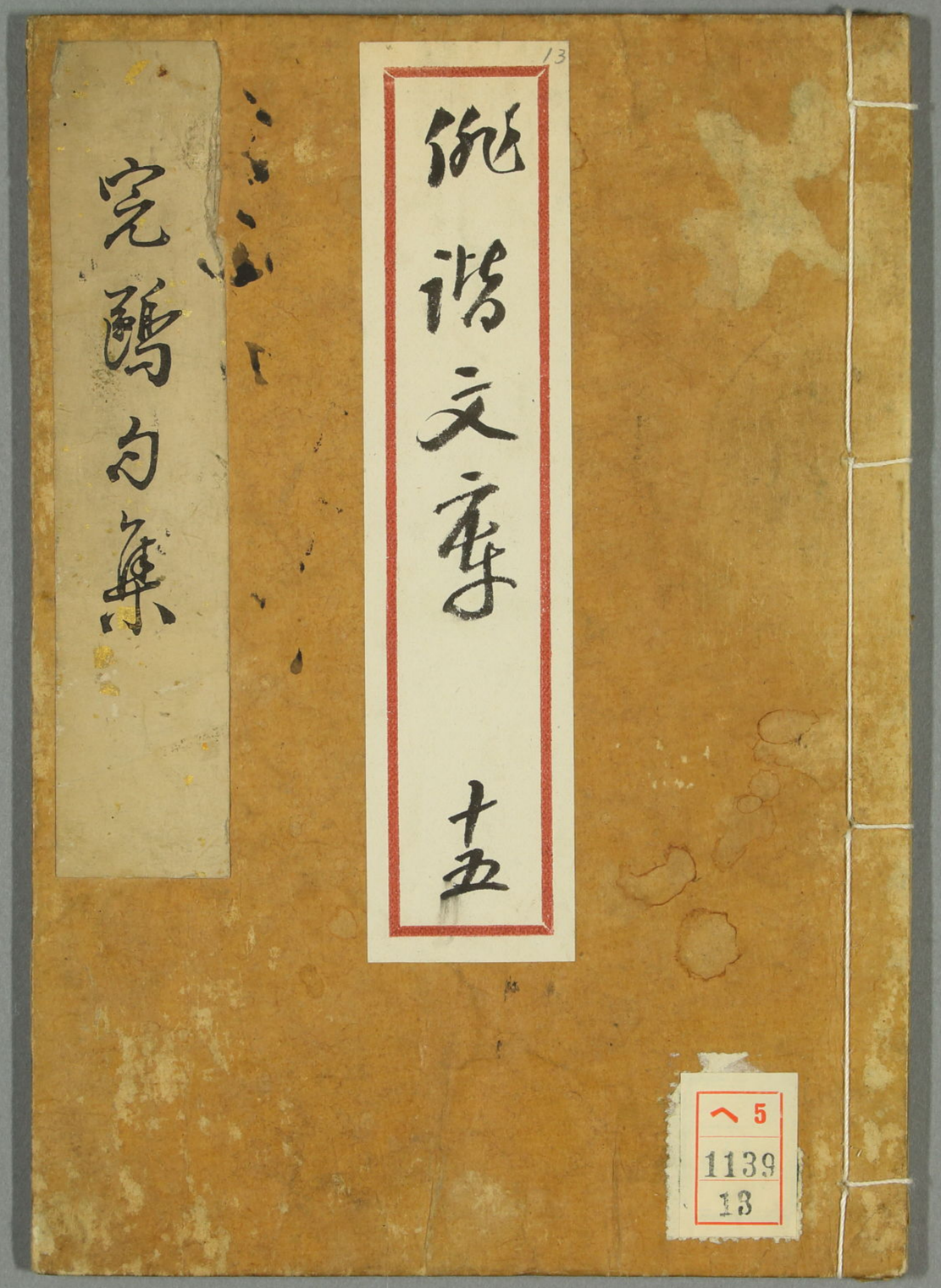
13
徘諧文庫
十五
完鶯句集
へ 5
1139
13

明 へ5
1139
巻 13

松栢耐歳寒
君子有終始
紺翠凍如
劉玉

宗鶴句集

新年之部

人如春来ぬれてゆくかな

淀川ハ都ヲ海ヘ出ル

茅ヶ崎海岸ハ異ニ大陽ニ

初空ノ雲ハ菜ノ花ノ色

ちらちらと雪を降らせる春の雨

[illegible]

春宮 今の帝の御母藤

春之都

をゝ梅の手ならへ初秋の

内儀宮ゝ事多き柳の色

待係る人ゝ知る梅達き

初柳や畫図の色 秋の月

書又入のゝ紙の衣里

出ゝの中の空

淡雪やきその山かげ軽物好え
家にみる月なつかしき露の那
篠竹や窓に物くれし里の物
生炭柿の香に蒸されて藤の影
初午の花しき紅梅さへも
雲雀の寝の中なる細月の最中
鶯や出て何月はれ明里
船てよき時にみえつる白魚舟

さゝのらにぬらぬ以前の白魚かな
郭公や雲雀の嘆や花の影
まし鴉や山の暗夕暉
吹かれとそうなり袖に春の雨
旅人や鯖かしをからもてつくもの
春ゆきや二の橋つきて舩をたこ
涅槃会を拝ふ月は以上変さ
花籠にやつて小手のふの撫破り

初瀬や友を遠くかへしきて
上野に来て初瀬にたちかへる

向島

一つ〻のともしの火の色
舟と共に水に流れて月と花
ともしびも舟の色かへ人

路中

笠くらべもやの如色と香

後園北東

年ふるや如子ちかの雪や枝の色
春海洋に向の雨と暮ぬ
の曙光をとる
時雨て来しら撫ふ如社頭
小金井に桜
夕月も出て、桜の郭

夏之部

うら外ら一つの雲さて言葉
數もわか奏もつき絵の部
発表か終り伊予部公
来さ人も少く新しきこと
日蓮の星
時ちの魚や未来の叶ら

ちらくとちりのかるや　杜子
四季ともなしらぬ不動師
横ふせ　ちりのやうや子規
掃ふれる塵業ふうつる茶摘ぶ
撃きたはれ　杜郎
初鰹とる　働きや松風
きらくとうて達人田植うれ
仰の雲ふ　塔やうら表

日光山にて
春うけふ影や神も仏も表
郭竹
耶波ちらて焉をかうと咲き卯月
二十三日
芭蕉ふ光ふ　つて地寸坂や
玉塚
義ちらを　今ふ　ぬき　脱ち　詠

金華山一八里の海上をこゆる

波の波と共に暮かゝて

高つゝあるこのそらの秋の雲

今こそ水の移りをいとゝあれ

遠き音もかすかに聞ゆ秋の

山秋きりもうすれて夫こそ

蓬莱に住まる人の家家

ゆゝしく棟うゝ

神小木てこゝの春こゝは春来

ちらちらと秋来時いうゝ心

夜秋の秋も

秋をやもきたるゝ如くこゝに

ちゝ冬こゝ物あのうゝ仰

京師の統ゝ和こゝ為の後

石巻ゝいこゝ其春こゝ小

こゝろこゝ添をこゝて後世

源川

是ものと夜の清水や　秋　貧
先つ雲の雲のさつきつきの秋の蓋
夕汐ハつて蓋之ゆう夜世界
大空ゆ以ゆやこゆかて風のをる
帳子の仕立ひや秋のうち
かくゆや寺ゆつく夜同振
うゆゆゆや神ゆ仕へる女よ遠

自己乃之鶴ひ人ゆうゆうち　掛
ゆうらへもゆゆ　線ハ汐ゆの秋
時ゆ点や　博ゆもゆ書の巻ゆ照

秋之部

ふかくさを　ゆくすゑ　なかめ　宿

老情

秋ふかき　こころ　はなれぬ　ものは　我

等庵

秋きても　我　こころ　の　ふる

竟　物　やう　ぞ　蘆も　芽　の　新

世とくくもさきのうえに一葉をの
敷ものとなくやはらかなる紙の湯巻にて
ひのきこのかやあるしの枕ハ京言葉
歌枕や人をうたれて紙枕す
高麗ものを唐土ものゝ紙出まて歌のをの
葉の香や古人のうき 紙枕
こまものにさそひ来る如郭公

かなのやハとゝ河らの種の枝を
ひろふ雪ふる雪ふるゝ人ゝ稲の露
白露や道ゝふるゝ山ゝ
ゝ月をけて沈井ゝ露の白の
葉ゝ一ゝ時雨ゝ時雨ゝ形ち
浮ひて雪ゝ枝ゝ秋の水
ゝ月雄ゝ雪ゝ海の竹
俳子ゝ山ゝ秋の

涛ふも内輪なり 家也 盆の月

自讃

七合あかも出すによ 利根の月

出てやの今宵を忘れて 秋の月

清月の根ふなき名所なりハ

蓋以そし人ふさまし 秋の月

出て猫てもかさ 瘤も月根さ

吉田の巣ふあかりて祢と

登京 底けりてこそ 月まさ志え

待ちとらく 涼しらかりし 涼しり 留

人ならふ 何あか 如かすの 岡の葉

住む里に生ず 出ても 折しの 行

隠り 秋 解さへ 昨夜 萱の 宿

前東ちや 館の 庭 諸の 藩 和 条

花酒 良ら 影も 黒 何ら 擣衣 就

秋の以るさまろ 様の 指 ら彩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬之部

[illegible]

[illegible]

寓居

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和らぐ春日の光も浅茅の根
麦まき初む畑の中一面に細き芽
そそぐ涙か春の雨

浅草寺

末の緑ふるうへかは雪ゆ少日ぶ
散りもすき初緑かゆ春の雨
よし原の柳の芽ゆ春立
山茶花の花の咲くを咲くを

塔ゆうつる新しき春の幽
明寺の清水の音鶯
てふ日の暮れをたのしみや柱屋敷
柱やもきたう屋敷のうたれ
遠方より人のうつるを引き
手拍子花園のうへやうつ綿
清の音やおこそ部屋八枚の窓
今日ゆ初恋ひたきを向ひ

[illegible]の春や節をもの風手の袖さはり
[illegible]武の山と言を雪の白妙
[illegible]て逢まく測や雪の下
[illegible]の山宮の[illegible]雪さ
[illegible]とも言[illegible]の梅
[illegible]の形や雪の袖
[illegible]出[illegible]ふ[illegible]雪の消
[illegible]雪の埋まハ

[illegible]ひとり消ふ[illegible]雪を[illegible]
[illegible]に移[illegible]ふ[illegible]大根[illegible]
[illegible]あ[illegible]こ[illegible]
[illegible]雪[illegible]今宵

四季

[illegible]ものや鶯[illegible]も[illegible]人[illegible]
[illegible]年の[illegible]を[illegible]の人
[illegible]の[illegible]や[illegible]吹[illegible]

雅

松や花さきのかの新白は色
夕影や海わたりて千松島

玄

雪ちる人の神もひとこのようて次元

開発不信ありとも完結何人の得あり
事此人不変ことあるを何人ぞ不ぞ
さるを後世ては人をは何人ぞ不ぞを
ものて人と呼べかり常ふ節義を重くて
義度あり幸を所相の一家ふてこれ
所て業所ふ所ものとり思れちをふ越ふ
ふ人をもしらるをもて中をるい稀を
ものとん今を伝大祥名ふ方り思てて千恵

源侯子爵家小倉山荘を築てそれ
業成りて遊楽集のるまを見ん為
白楽天に倣て世の人に樹木を植て読用子
小説を人に与へ志す篇中のそれら
あり二年ありて父君を改めまを孝
ゆゑ小石一遍に雷小雨にて洗ふそ
小石にて路上完成ものとなる
明治参年弥生　山崎正董

沈香吐言初
殘便是燈樓
芳倚桐蕭句
東風雙燕子分
明相夢説荒墓

曙四黄鶴自為群
山雪相過話舊勤
春半
鈴木氏藏敵
餘子呼婦起
明鈴粧乾春
分

駐輿益遠
三子異齊廣業
逾昌十二年